

## アメリカ文学のわからなさの起源をさがして

加藤雄二

不可知のもの、「わからないもの」についての現代アメリカ文学作品は枚挙にいとまがないほど多い。現代の作品では、たとえばドン・デリーロ (Don DeLillo) の『リブラ (Libra)』(1988) である。『リブラ』冒頭に後に付け加えられた序文では、作品全体の起源となる JFK 暗殺の場面の音声録音に取り上げられ、銃声の数ですら未知であることが強調される。暗殺の原光景を記録した録音は、そもそも実際に何が起きたかを確認する根拠にすらなり得ない。現代史の重大事件を扱う作品が、何が起きたか「わからない」ことを前提として書き出されているのである<sup>1</sup>。

いわゆるポストモダンが常識的な理解の枠組みとして受容されて以降、いまさら述べるまでもなく、絶対的な知の不可能性が一般的了解となった。『リブラ』の類似例は、アメリカ初のポストモダン小説とされることもあるウィリアム・フォークナー (William Faulkner) の『アブサロム、アブサロム! (Absalom, Absalom!)』(1936) を先駆けとして、現代アメリカ文学に多く見られる。『V.』(1963) や『競売ナンバー 49 の叫び (The Crying of Lot 49)』(1966) などのトマス・ピンチョン (Thomas Pynchon) による初期作品、ジョン・バーズ (John Barth) の諸作品などが典型的であり、日本でよく知られているポール・オースター (Paul Auster) も同様の認識を基盤としていたはずだ。

ただ、絶対的な知の不可能性という認識が、ポストモダン以降の時代に生じたものではないことを、あたためて思い返してみることも重要だろう。主体による超越的な知あるいは知識への欲望とその不可能性が文学のテーマとなったのは、おそらく近代哲学や文学一般に通底する流れの一環だったのである。アメリカでは、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) が『白鯨 (Moby Dick)』(1851) で同時代の超絶主義 (transcendentalism) を揶揄しつつ、エイハブ船長の探求とその失敗を主要なプロットとしたことなどがその一例となるだろう。しかし、超絶主義を体現したラルフ・ウォルドー・エマーソン (Ralph Waldo Emerson) やウォルト・ホイットマン (Walt Whitman)、あるいは彼らを引き継いだ現代のビートニクらによる、雄弁な民主主義的主体とその語りを重視する作品がアメリカ的なものを代表した一方で、主体の現前を前提としない、それとは異なった知へのアプローチが並行して見られたことにも眼を向ける必要がある。『リブラ』だけではなく、ピンチョン、バーズ、オースターらの諸作品は、主体と自然、あるいは主体と世界の間を核とするロマン主義的な前提に基づくのではなく、象徴主義的な前提に立つフィクションになっており、エマーソンらの超絶主義とは別の、もう一つの 19 世紀的伝統に近いからである。

## 1. 「わかる」謎解きから「わからない」謎解きへ

作品の具体的検討に入る前にまず例を挙げてみたい。アメリカ文学とされる作品が創作され始めたのは概ね18世紀末から19世紀初頭で、初期のアメリカン・ゴシックを代表するチャールズ・ブロックデン・ブラウン (Charles Brockden Brown) の代表作『ウィーランド (Wieland)』が出版されたのは1798年、作者がセンチメンタル・ノベルに転じた後の最後の作品『ジェーン・タルボット (Jane Talbot)』は1801年に出版されている。ブラウンがアメリカ初の職業作家として立つことに失敗し夭折した後に続いたのは、『スケッチ・ブック (The Sketch Book)』(1819-20) で知られるワシントン・アーヴィング (Washington Irving)、「死生観 (Thanatopsis)」(1817) の詩人ウィリアム・カレン・ブライアント (William Cullen Bryant)、アメリカ版サー・ウォルター・スコット (Sir Walter Scott) とも言えるジェイムズ・フェニモア・クーパー (James Fenimore Cooper)、エドガー・A・ポー (Edgar A. Poe) などだった。

しかし、従来しばしば指摘されてきたように、上記の作家・詩人たちによる民主主義初期のアメリカ文学は、革命以降の時代の産物であるにもかかわらず、必ずしもロマン主義的ではなく、主にヨーロッパの啓蒙主義時代のものに近似した文化と文学であり、整然とした法則性や機械的な世界観によって特徴づけられる古典主義に近い世界観に基づいていたとされる。つまり、ブラウンによるゴシック・フィクションは、機械論的に可知的とされる世界を前提とし、謎が解けることを暗黙の了解とした仕掛けのものであると理解されていた。18世紀西洋文化の伝統的な分割法に倣うならば、ロマン主義以前、あるいは一般にロマン主義に対立すると考えられる知的・芸術的パラダイムに則って彼らは創作したことになる。ウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth) やジェーン・オースティン (Jane Austen) など、文学史で取り上げられるロマンは時代の正統派詩人、作家たちは、産業革命の産物として勃興しつつあった都市文化の一部として消費されたゴシック・フィクションを嫌い、積極的に批判したが、ゴシック・フィクションには、ロマン主義の萌芽やそれと共通する要素と同時に、啓蒙主義的な機械論的世界観が共存していた<sup>2</sup>。

ゴシックはポピュラー・エンターテインメントの元祖でもあり、それに類似した役割を果たすべきジャンルだった。アメリカを舞台として初めてそのジャンルのフィクションを創り出したブラウンの『ウィーランド』や『エドガー・ハントリー (Edgar Huntly)』(1799) などの代表作が、腹話術や自然発火、夢遊病など、これ見よがしで派手な仕掛けに基づいており、合理的な謎の解決を結末としているのは、時代を考慮するならばある意味で当然だった<sup>3</sup>。レズリー・フィードラー (Leslie Fiedler) らが指摘し、また現代に至るまでの多くの文学、映像その他のアメリカ作品が顕著に示してきたように、アメリカ文学は主にヨーロッパ、イギリスを起源とするゴシックを基調とする<sup>4</sup>。ロマン主義と古典主義が現在に至るまで截然と区別することができない近代の芸術思潮であり続けていることを前提に述べるならば、アメリカ文学の基調となる要素の一つは、ロマン主義的というよりもむしろ啓蒙主義的、古典主義的であり、自律的な自我の中心性に基づいた表現ではないということだろう。

ワーズワースやオースティンの批判にも関わらず、ロマン派以降の時代にもジャンル

としてのゴシックは栄え、イギリスでは1818年に出版されたメアリー・シェリー (Mary Shelley) の『フランケンシュタイン (*Frankenstein*)』(1818)が、作者の夫パーシー・ビシー・シェリー (Percy Bysshe Shelley) がその一人だったイギリス・ロマン派第二世代におけるゴシック的感性を代表し、19世紀アメリカ文学では、ポーやナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) がその代表的な作者となったばかりでなく、ハーマン・メルヴィルも『ピエール (*Pierre*)』(1852)「ベニト・セリノ (Benito Cereno)」(1855)などの作品で頻りにゴシックの形式を用いた。産業革命と国外での領地拡大の時代に相応しいファウスト的かつSF的な科学的知の増大をテーマとする『フランケンシュタイン』は、科学的知のパラダイムとその問題点を新たなゴシックの題材として提供し、同じく科学的知と恐怖に関するテーマを兼ね備えた作品を産み出したポーの先駆けとなり、「あざ」(*The Birth-Mark*) (1843)『緋文字 (*The Scarlet Letter*)』(1850)などにフランケンシュタイン博士に類似した科学者像を登場させたホーソーンにも影響を与えた。アメリカでは1830年代以降、エマーソンら超絶主義者たちによって、イギリスに数十年遅れてロマン主義が導入された。エマーソンと同時代で、彼の思想に概ね批判的だったポーとホーソーンの活躍によって、おそらくゴシック・フィクションは新たな意味合いを帯びるに至った。というのも、ブラウンのゴシックが、トマス・ジェファソン (Thomas Jefferson) に献呈された『ウィーランド』や、その後のセンチメンタル・ノベルに込められた政治的意図にも関わらず、装置に基づいた「わかる」謎解きを提供したのに対して、ポーの一部の作品やホーソーン作品の多くは、謎解きによって解明できない「わからなさ」を孕んでもいたからである。

## II . エドガー・A・ポーと「わからない」謎解き

その典型的な例となるのが、ポーのいわゆる探偵小説である。現代の常識的な探偵小説は、探偵による合理的な謎解きを中心的なプロットとして提示するはずである。しかし、C. オーギュスト・デュパン (C. Auguste Dupin) が登場するポーの「探偵小説」は、しばしばそのジャンルの起源とされるにも関わらず、そのような現代の探偵小説とはかなり異なった作品になっている。たとえば「盗まれた手紙 (*The Purloined Letter*)」では、盗まれた手紙の内容が一切明かされないだけでなく、手紙を盗んだ「大臣」の動機も明らかにされない。現代の探偵小説でむしろ規範的とされる実証的な事件の捜査は、それを徹底して行う警察の無能さを通して批判的に検討される。デュパンは実証的な手続きを踏むことなく、女王に宛てられた手紙を盗んだ大臣との共感を通して事件を解決するのである<sup>5</sup>。ポーの探偵ものとしてよく知られているのは、「盗まれた手紙」に加えて、「モルグ街の殺人 (*The Murders in the Rue Morgue*)」(1841)「マリー・ロジェの謎 (*The Mystery of Marie Rogêt*)」(1842-43)であるが、前者では犯人は人間ではなくオランウータンであるとされ、2人の女性犠牲者の殺害の動機が理解されないままになるし、後者は推論の積み重ねに終始する。デュパンの推理は古典主義やリアリズムの実証的原則によって行われるというよりも、むしろ実証的な知の不可能性と想像力による推論に基づいているとも言えるだろう。その結果として、読者は事件の概要を固定された絶対的知識として手にいれることができない。脱構築の時

代の代表的な文芸評論である『盗まれたポー (*The Purloined Poe*)』でジャック・ラカン (Jacques Lacan)、ジャック・デリダ (Jacques Derrida)、バーバラ・ジョンソン (Barbara Johnson) が実演してみせたように、ポーのテキストとデュパンの推理は、確実な知に辿り着くのではなく、知の可能性を求める推理の連鎖を生むのである<sup>6</sup>。

ポーには他にも探偵が登場しない犯罪ものが多数あり、信頼性を欠く一人称の語り手によって語られる「黒猫 (*The Black Cat*)」(1843)「告げ口心臓 (*The Tell-Tale Heart*)」(1843)「アモンティラードの樽 (*The Cask of Amontillado*)」(1846) などでも、作品の解釈は最終的に読者に委ねられ、決定的な実証的根拠は示されない<sup>7</sup>。犯罪ものというよりはSFに近い作品だが、人間の死と催眠術を道具立てとして用いた「ヴラデマール氏の症例の真相 (*The Facts in the Case of M. Valdemar*)」(1845)も、実証的な実験の記録の体裁を取りながらも、謎を残したまま解釈を読者に委ねる作品となっている。因みに、後の1898年に出版されたヘンリー・ジェイムズ (Henry James) による有名な怪談『ねじの回転 (*The Turn of the Screw*)』(1898)もまた、一人称の語り手を二重、三重に重ね合わせた仕掛けによって、実証的な理解の可能性を徹底して排除した作品となっており、ポー作品との類縁性を感じさせる<sup>8</sup>。ポーは必ずしもロマン派の作家の一人に数えられず、「創作の哲学 (*The Philosophy of Composition*)」(1846)で自作を論理的に解説するなど合理主義的、古典主義的傾向を持つとは言え、解き明かされない謎を一人称の語り手の意識やそのライティングに見出すという意味では、人間と世界の関係の不可解さを探究するロマン派的傾向を示した作家であったと言えるだろう。

ここでいくつかの点を確認しておく、古典的ゴシック小説における謎は、それ自体が象徴的であるということではなく、作中に仕組まれた何らかの装置によって生み出されるものである。また、優れた探偵の特権的な観点から謎が解き明かされる形式で書かれたその後の典型的な探偵小説における謎解きでは、推論とそれを支えるナラティブが作品の結論として他の推論を排除し特権化される。通常の探偵小説における作家の技は、特権化された結末とナラティブに至るプロセスをいかに自然なものに見せかけるかに依拠するはずだ。しかし、探偵小説も文字によって書かれたテキストであるからには、そこに記された文字表現の意味づけの恣意性を排除し、特権化されたナラティブとしての推論を絶対的なものとしてあらゆる読者に認めさせることは難しい。ポーはおそらく謎解きに懐疑的な読者の一人でもあったのだろう。

ポーの探偵小説において、権威を持たない私立探偵デュパンの謎解きが権威を帯びた警察による捜査と並行して提示され、実証的というよりも恣意的な推論の形で有効な推理として提示されるのは、謎解きを題材とするテキストにおける特権化されたナラティブと、それによって排除される、権威を帯びない他の可能性としてのナラティブの共存を装置として組み込んだ結果だろう<sup>9</sup>。装置による説明や絶対的な推論として特権化されるナラティブをテキストの意味として自然化する探偵小説が、テキストにおける記号の戯れを抑圧する一方で、特権化された装置や推論のナラティブを相対化するポーのもののような探偵小説は、より民主主義的な作品だと言える。警察を代表する警視總監Gと、何らの権威も持たない没落貴族デュパンの推理が対比される形で提示され、警察が解けない謎をデュパンが推理してみせる設定は、作品のテキストを再読に耐える多様な可能性を秘めた文学作

品として際立たせる役割を果たしている。

ポスト構造主義以降の現代の批評家がポーのテキストに関心を抱いたのも、ポーが作品の多くのテキストを単一のナラティブや意味に還元されないものとして提示したからだと推測されもする。ポーの「黒猫」の語り手は、作品の夢的なテキストを、語るのではなく「書いた (pen)」ことになっており、将来自分以外の人物がテキストを正しく解釈してくれるはずだと述べており、テキスト解釈の多様性を強調している。「黒猫」はその意味で、ある種の謎解きあるいは探偵小説であると考えられるが、だからと言って語り手が単一の特権化された読みを要求しているとは限らない<sup>10</sup>。現代作家、たとえばカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro) がそうするように、一人称の語りがそれ自体の意味作用の破綻を演じるのに伴い、他の解釈やナラティブを救い出す可能性が見出されもするからである。また、有名な「アッシャー家の崩壊 (The Fall of the House of Usher)」(1839) にしても、建築物としての家は言語によって構築された特権的な家系の類比であり、あらかじめ亀裂が入っていた家の建造物がインク壺を思わせる黒い池の中に崩れ落ちる結末は、家と家系を構築するナラティブがその特権性を失う過程を描いている。ポーが特権化されたナラティブ—たとえば白人の家や家系に関するもの—がみせかけの根拠によって正当化されるプロセスを絶えず脱構築しようとしたことがわかるはずだ<sup>11</sup>。

### III. ナサニエル・ホーソーンと「黒いヴェール」の象徴性

アメリカではポーよりも読者に親しまれており、ポーと同時代に創作し知の不可能性を強調したのはナサニエル・ホーソーンであるが、ホーソーンは、象徴を装置として用いたポーとはいくらか異なった方法で知の可能性を提示した。『トワイス・トールド・テールズ (Twice-Told Tales)』(1837, 42) などの作品集に収められた傑作短編や『緋文字』でホーソーンは、ヘスター・プリン (Hester Prynne) の年老いた夫ロジャー・チリングワース (Roger Chillingworth) や、妻のあざを科学的方法によって取り去ろうとする「あざ」のエイルマー (Aylmer)、娘を毒のある女性に育て上げる科学者ラパッチー (Rappaccini) になど、超人的な知を体現する科学者像を作り出しただけでなく、謎解きともそうでないとも判然としないプロットにより、知の不可能性という認識に新たな次元を与えている。ホーソーンは『緋文字』出版に至るまで短編の創作を長く続け、徹底した作家修行を自らに課したことで知られるが、『トワイス・トールド・テールズ』に収められた「若いグッドマン・ブラウン (Young Goodman Brown)」(1835) や「ウェイクフィールド (Wakefield)」(1835) 「牧師の黒いヴェール (The Minister's Black Veil)」(1836) などの作品では、知の不確かさを人間の無意識的な領域への探究と併せて追求している。特に最後に挙げた「牧師の黒いヴェール」では、歴史と宗教的背景を踏まえた上で、知の不可能性と可能性の変容を描き出し、興味深い観点を提示している。本論の文脈で特に意義深いのは、『緋文字』のタイトルが指し示す「A」の文字に代表される、文字通りの象徴的表現 (symbolism) だろう。

たとえば新歴史主義が確立されて以来注目されてきた「牧師の黒いヴェール」は、記号とその意味の、上記のような政治的意義を前景化する装置として読むことができる。ホー

ソーンによる他の歴史物と同様に17世紀ピューリタン時代の前例に倣って書かれたフィクションとしてのテキストは、ある日曜日の朝、フーパー牧師が顔の前に黒いヴェールを被って信徒の前に現れ、それを生涯脱ぐことなく埋葬される経緯を語る中心的なナラティブを含んでいる。神政政治時代の牧師であるフーパーは、許嫁エリザベスにそれが「原型 (type)」「象徴 (symbol)」であり、すべての人間の「黒いヴェールによって原型として示される暗い悲しみ (sorrows dark enough to be typified by a black veil)」を表すものだと説明する<sup>12</sup>。しかし、信徒たちや他の宗教者たち、彼の許嫁までもがその説明を受け入れず、頑なにヴェールの象徴的意味を信じ続けるのはフーパー牧師だけである<sup>13</sup>。したがって、このテキストを読む読者は、当然のようにその意味づけをフーパーの定義に頼らず探ることになり、作品は探偵小説にも似てくる。特権化されうる最も典型的な読みはたとえば、フーパー牧師がその葬式を司る若い少女と密通しており、葬式の場面で少女が身を震わせるのは性的恍惚によるものなどといった、ありがちな性的読解である。この読解は、『緋文字』のヒロインであり、「姦通を犯した女 (adulteress)」の頭文字 A を胸につけることをピューリタンたちに強制されるヘスター・プリンの事例を考慮すればより強く特権化されうる。また、ヴェールを身につけるのは通常女性であることから、フーパー牧師が男性器の象徴である鼻を隠し、女性的なアイデンティティを帯びているのだと議論することも可能だろう。最後の審判を迎える準備としてヴェールを被るフーパー牧師は、いわゆる「神の花嫁」であると推察することもでき、そうした議論が実際に提示されてきた。

しかし、そうした解釈が特権化される絶対的根拠を、この短い短編に見出すことは結局のところ不可能である。作品のテキストは、ヴェールに関する宗教的・政治的権威であるフーパー氏自身のナラティブすら特権化しない。死の床についてもヴェールを外そうとしないフーパー牧師の臨終の床では、親しい周囲の人々も呆れ果て、彼はヴェールを被った遺体として埋葬されるが、ヴェールの下で朽ち果ててゆく顔を語る結末部分は、彼の生涯の異様さを強調するだけだからだ<sup>14</sup>。この作品が、宗教的動機づけが希薄になったピューリタン共同体の中の宗教的リヴァイヴァルを促した一牧師を描いたものだとする議論もあり、フーパー牧師が冒頭、新興商業都市であるニューヨーク「ウエストベリ (Westbury)」の牧師に代わって説教壇に立つという設定や、「ウエストベリ」という地名が西漸運動に繋がる西に向かった土地獲得を示唆すること、冒頭の場面が礼拝に集う人々の世俗的関心を強調していることなどを勘案すれば、その解釈にも納得がいく<sup>15</sup>。本人の語りで「原罪」を表すと意味づけられるヴェールをあえて身につけるフーパー牧師は、資本主義的経済体制が持つ相対主義的な価値観に対し、原罪という、キリスト教における死すべき人間にとっての絶対的な起源への回帰を促し、宗教により規定された起源と歴史を知として具象化しようとしているとも考えられるだろう。

しかし、作品全体はピューリタン時代であれば特権化され得たはずの、フーパー牧師のナラティブを支持してはいない。実際のところ「牧師の黒いヴェール」のテキストは、形式的にはフーパー牧師の生涯とナラティブを中心として展開されているものの、その絶対性をむしろ相対化する異質なナラティブの集成として組織化されている。テキストは、教区民たちによる、牧師のヴェールの異なった解釈の束となっているからだ。人々はフーパー牧師による原罪としてのヴェールの定義づけを真に受けて信じるどころか、それぞれが自

分自身の解釈を口にする。そのため、作品におけるテキストの解釈は、ピューリタン教区に特有の限定を帯びているとはいえ、一つに限定されない多様性を帯びている。しかも、ヴェールの謎がフーパー牧師によって予め解答を与えられているため、それに関する謎解きさえもが、特権化されうる解答とそれを包含するナラティブになるというよりも、他の教区民の解釈と同一レベルにある、フーパー牧師による解釈の更なる解釈を提示するにすぎないことがわかる。

つまり、宗教的な観点においては第一義的であるはずのフーパー牧師の宗教的ナラティブは、この作品で予め脱構築された形で提示されていると言える。J. ヒリス・ミラーが脱構築の観点からこの作品の徹底した作品分析を実践したことにも十分な理由があったのである<sup>16</sup>。「牧師の黒いヴェール」でヴェールの意味が変化する過程は、『緋文字』でヘスター・プリンの身につけるAの文字が異なった意味を帯びる過程と類似している。記号としての象徴は、現実や実在としての歴史を指し示すことはなく、決定的なりファレントと意味を与えられることがないシニフィアンであり、そのため不可知なのだ<sup>17</sup>。

ちなみに、記号がリファレントや意味に還元不可能であるとするホーソーンのこの認識は、アメリカロマン派を代表する思想家エマーソンの言語論とは対極的なものでもあった。自然や神との合一を説いたエマーソンにとって、「言葉とは自然の事実の記号であり」、「特定の自然の事実は特定の精神的事実の象徴であり」、「自然は精神の象徴」であり、言語は自然やその背後にある精神を表す代理的記号であるとされたからだ<sup>18</sup>。

## 終わりに

上に名前を挙げたJ. ヒリス・ミラーが指摘するように、ホーソン作品における象徴性のこの特質は、エマーソンの言語観とは異なり、実在論に基づいた歴史認識と鋭利に対立し、歴史小説としての作品のフィクショナル리티を際立たせるだけでなく、実在論に基づいた歴史認識一般にも疑問を投げかける<sup>19</sup>。ホーソンが自らの作品をロマンスと呼び、『緋文字』序文でそれを現実と空想の間の「中間領域 (neutral territory)」と定義したことはよく知られている<sup>20</sup>。初期ピューリタンの末裔でもあったホーソン自身も当時のアメリカの特権階級に属しており、そのことが階級、ジェンダーに関するバイアスを彼の作品や文学観に与えていたとする議論があるにしても、歴史として書かれたフィクションのフィクショナル리티を殊更に際立たせる彼の作品には、現実や歴史、それらに関する知の不可性を探究する方向性が与えられていたことは否定できないだろう<sup>21</sup>。その方向性が、正統とされる歴史の中で抑圧されてきたものたちに眼を向ける方法となっていたことにより、ホーソンの作品は、方法が異なるとはいえ、女性や有色人種により顕著な重要性を与えられうる場を与えたポーや、ホーソンの影響を強く受けたメルヴィルのものとも呼応し、響き合うのである。

象徴的手法により、テキストを構成する記号そのものの機能を一義的解釈から解き放つその方法は、知を主体によるプライベートな対象把握の枠組みから解き放ち、記号と言語の解釈に必然的に伴う公共の場へと解き放つ。「牧師の黒いヴェール」が、神政政治の

時代から民主主義への移行を解釈の拡散と解放の過程を通して描き出すように、記号論的な解釈学はアメリカ文化の民主主義化の方向性を指し示しもする。メルヴィルがホーソンに捧げた『白鯨 (Moby-Dick)』(1851)で、「モービー・ディック」と呼ばれる白い鯨の解釈をエイハブと船員たちに委ねたり、海に落ちて錯乱するピップによる視点の多様性の認識に重ねたりするのは、自然の権化でもあり、その白さが意味づけを拒否する鯨を、エイハブが一義的に定義づけようとする事への抵抗でもあるはずだ。

冒頭に挙げたデリーロの『リブラ』が、ホーソンやポーの先例を意識していることは、後に書き加えられた序文「暗殺のオーラ (Assassination Aura)」が、タイトルでAの文字のダブリングを用いていることで示唆されている。また、ある編集者がJFKの暗殺者とされるLee Oswaldの名前をLeigh Oswaldと綴っていたとされているため、ナボコフの『ロリータ』で、ハンバート・ハンバートの初恋の相手がAnnabel LeeならぬAnnabel Leighであったことが想起され、推測ではあるが、そこにポー、ナボコフに連なろうとする自意識を読み取ることができるかもしれない。また、「わからない」小説のもう一人の実践者フォークナーが、信頼できない語り手によるナラティヴと、2人の白人学生たちが戯れとして創作した歴史の再構築を、『アブサロム、アブサロム』で現代における19世紀南部の新たなヴィジョンとして提示するに際し、ポーの「アッシャー家の崩壊」を参照し、手紙や墓碑銘の解釈をその基盤の一つとしていたことを考えれば、現代作家たち自身が、小説の形式を彼らに先立つ19世紀作家たちに見出していたことがより明確に意識されるだろう。「わからなさ」は、アメリカ文学がこのように、インターテクスチュアルな累積として成り立つ原動力になっていたのである。

現代アメリカ文学には、デリーロの『リブラ』のように、明示的に理解できないものとして歴史を描き出す作品が見られるし、いわゆるポストモダンの時代の作品の多くは、絶対的真実や知の可能性を否定する立場から様々な作品を創作してきた。

しかし、絶対的知の不可能性を前提とした作品はポストモダン以前からアメリカ文学に多く見られ、そのテーマが近代一般の問題であることを示唆する。アメリカ文学はゴシックの伝統を引き継いだものとされるが、エドガー・A・ポーによる探偵小説やミステリー作品は、彼に先立つゴシック作家たちの作品が謎を説明しうる合理的なものとしたのに対し、絶対的な根拠を欠いた推論によって謎が解かれる、非実証的な推理のプロセスを示す作品となっている。

また、ナサニエル・ホーソンの「牧師の黒いヴェール」のように、象徴とテキストが絶対的な意味を指し示さない、象徴主義的な表現に依拠した謎解きが見られ、そこでは意味が確定され得ないテキストや歴史が、ポーのテキスト同様、解釈の連鎖を生み出す装置として捉えられている。

デリーロらポストモダン時代の作家たちや、彼に先立つナボコフ、フォークナーなどの現代作家たちは、こうしたラディカルな先行作家たちの伝統に連なっているのである。

註

- 1 Don DeLillo, *Libra*. Penguin, 2006.
- 2 ワーズワースが *Lyrical Balads* 序文でゴシック小説を批判し、オースティンの『ノーサンガー・アビー』がゴシック小説の批判とパロディを含んでいることはよく知られている。
- 3 近年の研究ではブラウンの社会批評を読み解く作業が続いており、作者が急進的な思想を持ち続けたのか、それとも保守的なイデオロギーに回帰したのかが論争の的になっている。W. M. Verhoeven, “This blissful period of intellectual liberty”: Transatlantic Radicalism and Enlightened Conservatism in Brown’s Early Writings.” Philip Bernard, et al. eds, *Revising Charles Brockden Brown: Culture Politics and Sexuality in the Early Republic*. The U. of Tennessee P., 2024. 8-9. 参照。ただし、Peter Kafer が指摘するように、ブラウンはいわゆるゴシックの装置それ自体を重んじていたのではなくアメリカ社会の批評を重視しており、不可解な謎を提示することを作品の目的としていたのではない。Peter Kafer, *Charles Brockden Brown’s Revolution and the Birth of American Gothic*. U. of Pennsylvania P., 2004. 167.
- 4 Leslie Fiedler, *Love & Death in the American Novel*. Anchor Books, 1993. 27-28. 現代の一般的見解とは異なるが、フィードラーはブラウンやクーパーの文学的装置が「低俗 (vulgar)」であると述べ、十分な文学的価値を実現していないとしている。
- 5 作品末尾でデュパンがナレーターに推理のプロセスを語る際、たとえばその糸口を次のように説明する。““But the more I reflected upon the daring, dashing, and discriminating ingenuity of D—; upon the fact that the document must always have been at hand, if he intended to use it to good purpose; and upon the decisive evidence, obtained by the Prefect, that it was not hidden within the limits of that dignitary’s ordinary search — the more satisfied I became that, to conceal this letter, the Minister had resorted to the comprehensive and sagacious expedient of not attempting to conceal it at all . . . .” (私が大胆不敵な D—の鑑識眼を考慮に入れ、彼がそれを利用しようとすれば手紙がずっと利用できる状態にあったこと、警視総監が手に入れた決定的な証拠によれば、彼の通常の捜査で見つかる範囲には隠されていなかったことなどを考えるにつれ、大臣が包括的で賢い方法、つまり、それを隠すために、手紙をまったく隠さない方法を取ったのだとより深く確信するようになった。)” Edgar A. Poe, “The Purloined Letter.” Thomas O. Mabbott, ed. *The Collected Works of Edgar Allan Poe. Vol. 3: Tales and Sketches*. 990. デュパンのこの推論について、たとえば John T. Irwin は、以下のように述べている。“[T]he analytic solution of a mystery always leaves us at the end with the mystery of an analytic solution.” (「ミステリーの分析的解決は、最後には常に分析的解決そのものの謎を残す」) John T. Irwin, “Mysteries We Reread, Mysteries of Rereading: Poe, Borges, and the Analytic Detective Story.” Patricia Mervivale and Susan E. Sweeney, eds. *Detective Texts: The Meta-physical Detective Story from Poe to Postmodernism*. U. of Pennsylvania P., 1999. 52.
- 6 John P. Muller and William J. Richardson, eds., *The Purloined Poe: Lacan, Derrida and Psychoanalytic Reading*. The Johns Hopkins UP, 1988.
- 7 “The Black Cat” の語り手は、謎解きを後世の課題だと冒頭で述べているし、他の2つの作品では、実際に起きたとされることの妥当性の疑わしさに読者が判断を下さなければならない。
- 8 ジョン・エンク (John Enck) はこの作品を、確定的な真実性を与えない典型的にモダニスト的なテキストであるとしている。John J. Enck, “The Turn of the Screw and the Turn of the Century.” Robert Kimbrough, ed. Henry James, *The Turn of the Screw: An Authoritative Text Backgrounds and Sources Essays in Criticism*. W. W. Norton & Company, Inc. Norton, 1966. 259-69.
- 9 上掲のアーウィンが、現代の探偵小説とポーによる探偵小説の区別についても議論し、その2つを明確に区別している。Irwin, 27-28.
- 10 Edgar A. Poe, “The Black Cat.” Thomas O. Mabbott, ed. *The Collected Works of Edgar Allan Poe. Vol III: Tales and Sketches*. 849-50.
- 11 Edgar A. Poe, “The Fall of the House of Usher.” Thomas O. Mabbott, ed. *The Collected Works of Edgar Allan Poe. Vol II: Tales and Sketches*. 417.
- 12 Hawthorne, “The Minister’s Black Veil: A Parable.” *Complete Works of Nathaniel Hawthorne*. Vol. I. The Riverside Press, 1882. 62.
- 13 ブレンダ・ワインアップル (Brenda Wineapple) のように、フーパー牧師がヴェールの意味を明かさず、その意味は誰にもわからないとされることもある。しかし、フーパー牧師自身はヴェールの意味をまったく説明していないわけではなく、自分なりの解釈を提示していると考えられる。Brenda Wineapple, *Hawthorne: A Life*. Random House, 2004. 85.
- 14 Hawthorne, 69.
- 15 Hawthorne, 53, 67.
- 16 J. Hillis Miller, “Literature and History: The Example of Hawthorne’s ‘The Minister’s Black Veil.’” *American Academy of Arts & Sciences, Bulletin of the American Academy of Arts & Sciences*. Vol. 41. No. 5 (Feb. 1988). 15-31.
- 17 ただし、『緋文字』のAの文字やホーソンの象徴についての解釈に、明確な方向性を見出すサクヴァン・バーコヴィッチ (Sacvan Bercovitch) のような研究者もいる。バーコヴィッチはホーソンの象徴

を“directives to narrative unity”（「語りの統一性に向けた指示」）であるとし、“they teach us to synchronize different layers of history by gathering a diversity of meanings within a single, self-enclosed symbol.”（「それらは一つの閉じた象徴の内部における意味の多様性をまとめ、歴史の異なる位相を一つの時間に統合することをわれわれに教えるものだ」）と述べる。Sacvan Bercovitch, *The Office of the Scarlet Letter*. Johns Hopkins UP, 1991. 39.

18 Ralph Waldo Emerson, *Selected Writings of Emerson*. Ed. Donald McQuade. Modern Library, 1981. 14.

19 Miller, 20.

20 Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter. Nathaniel Hawthorne: Novels*. Library of America, 1983. 149.

21 ミラーは象徴としての black veil と作品のテキストについて次のように述べている。この点は重要なので長く引用しておく。“The black veil and its associated system of signs may mean this or they may mean that, but it is impossible to tell for sure, on the basis of the text, which reading is the correct one. Insofar as reading is to be thought of as a hermeneutic process in which the hidden meaning of the text is uncovered by an appropriate process of deciphering, this situation can be formulated by saying that “The Minister’s Black Veil” unveils the possibility of the impossibility of unveiling.”（「黒いヴェールとそれと連想される記号のシステムは、それぞれに異なった対象を指示しうるとは言え、テキストに基づいてどれが正しい解釈なのかを確実に言い当てることはできない。読解というものが、適切な解読の手続によって隠されたテキストの意味が明かされる解釈学的プロセスと考えられるかぎりにおいて、こうした状況を定式化するならば、「牧師の黒いヴェール」という短編作品は、隠されたもののヴェールを外し明らかにすることの不可能性を持つ可能性を明らかにしているということになる。」） Miller, 24. ここでミラーは、本論で議論されているアメリカ文学のわからなきの核となる問題を指摘している。

## 参考文献

Bercovitch, Sacvan. *The Office of the Scarlet Letter*. Johns Hopkins UP, 1991.

DeLillo, Don. *Libra*. Penguin, 2006.

Emerson, Ralph Waldo. *Selected Writings of Emerson*. Ed. Donald McQuade. Modern Library, 1981.

Enck, John J. “The Turn of the Screw and the Turn of the Century.” Robert Kimbrough, ed. Henry James, *The Turn of the Screw: An Authoritative Text Backgrounds and Sources Essays in Criticism*. W. W. Norton & Company, Inc. Norton, 1966.

Fiedler, Leslie. *Love & Death in the American Novel*. Anchor Books, 1993.

Hawthorne, Nathaniel. “The Minister’s Black Veil.” *Complete Works of Nathaniel Hawthorne*. Vol. I. The Riverside Press, 1882.

———. *The Scarlet Letter. Nathaniel Hawthorne: Novels*. Library of America, 1983.

Irwin, John T. “Mysteries We Reread, Mysteries of Rereading: Poe, Borges, and the Analytic Detective Story.” Patricia Merivale and Susan E. Sweeney, eds. *Detective Texts: The Metaphysical Detective Story from Poe to Postmodernism*. U. of Pennsylvania P., 1999.

Kafer, Peter. *Charles Brockden Brown’s Revolution and the Birth of American Gothic*. U. of Pennsylvania P., 2004.

Miller, J. Hillis. “Literature and History: The Example of Hawthorne’s ‘The Minister’s Black Veil.’” American Academy of Arts & Sciences, *Bulletin of the American Academy of Arts & Sciences*. Vol. 41. No. 5 (Feb. 1988).

Muller, John P., and William J. Richardson, eds., *The Purloined Poe: Lacan, Derrida and Psychoanalytic Reading*. Johns Hopkins UP, 1988.

Poe, Edgar A.. “The Black Cat.” Thomas O. Mabbott, ed. *The Collected Works of Edgar Allan Poe. Vol III: Tales and*

*Sketches.*

——. “The Fall of the House of Usher.” Thomas O. Mabbott, ed. *The Collected Works of Edgar Allan Poe. Vol II: Tales and Sketches.*

——. “The Purloined Letter.” Thomas O. Mabbott, ed. *The Collected Works of Edgar Allan Poe. Vol. 3: Tales and Sketches.*

Verhoeven, W. M. “This Blissful Period of Intellectual Liberty”: Transatlantic Radicalism and Enlightened Conservatism in Brown’s Early Writings.” Philip Bernard, et al. eds, Revising *Charles Brockden Brown: Culture Politics and Sexuality in the Early Republic.* The U. of Tennessee P., 2024.

Wineapple, Brenda. *Hawthorne: A Life.* Random House, 2004.

## In Search of the Origins of the Unknowable in American Literature

Yuji Kato

### Summary

Contemporary American literature includes works, such as Don DeLillo's *Libra*, which explicitly por-tray history as incomprehensible, and many works from the so-called "postmodern" era have been created from a position that denies the possibility of absolute truth or knowledge.

However, works premised on the impossibility of absolute knowledge have been common in American literature since before the postmodern era, suggesting that this theme is a general problem of modern times. American literature is said to have inherited the Gothic tradition, but, while the works of Gothic writers who preceded him presented mysteries as explainable and rational, Edgar A. Poe's detective novels and mystery works present a non-empirical process of reasoning, in which mysteries are solved through inferences lacking absolute evidence.

Furthermore, works such as Nathaniel Hawthorne's "The Minister's Black Veil" rely on symbolic expression to deal with mysteries, in which symbols and text do not point to absolute meaning. In these works, texts and history, whose meanings cannot be determined, are seen, like Poe's texts, as devices that trigger and create chains of interpretation.

"Postmodern" writers such as DeLillo, as well as contemporary writers who preceded him, such as Vladimir Nabokov and William Faulkner, are part of the tradition of these radical earlier authors.

### キーワード

アメリカ文学 知の歴史 エドガー・A.・ポー ナサニエル・ホーソーン ドン・デリーロ  
ゴシック小説 探偵小説

### Key words

American Literature history of knowledge Edgar A. Poe Nathaniel Hawthorne Don DeLillo  
Gothic fiction detective fiction